

# レジリエンスの諸相

—人類史的視点からの挑戦—

奈良由美子 放送大学教授

稲村哲也 放送大学教授

The Open University of Japan



放送大学教材  
1910035-1-1811

## コラム

ダッカの街で朝ランの風景—ダッカでの朝ランで出会った人々  
—一個のレジリエンスを考える

安藤 和雄 (京都大学東南アジア地域研究研究所)

私は1986年から90年まで、農業を専門として、バングラデシュで JICA の長期派遣専門家をしていた。現在も、タンガイル県カリハティ郡の農村で地域研究のフィールドワークのため、時々バングラデシュに滞在する。

私は朝ラン (朝のジョギング) を趣味としていて、フィールドワークでの旅先での朝の街や村の道路からの風景を見ながら走ることが楽しみとなっている。このときに出会う人々との立ち話から多くを学ぶことができる。こちらがジョギング姿で無防備ということもあろう。話しかけると大抵の人たちはこころよく話につきあってくれる。

バングラデシュでは現地語のベンガル語で、他の国では英語で話す。現地の人々は英語はカタコトであったり、全く通じなかつたりすることもある。言葉が通じなくても、朝の風景に溶け込んでいる人々の姿を見ていれば、それなりに理解できることが多い。

バングラデシュのダッカに滞在する時は、空港から私がフィールドとしている地方への国道に近い、ボナニー地区の「安宿」であるゲストハウスを常宿としている。この地区は以前、外国人が多く住む「高級住宅街」だったが、今は私立大学ができ、商業ビル、商店が進出し、かつてのイメージはなくなっている。レストランや商店に現地の人たちが溢れ、庶民的な地域になっている。そんな街の路地を私は朝ランしている。私は朝ランで出会った人たちを日記風のメモに残し、写真を撮らせてもらっている。以下は当時のメモの一部である。

■2013年12月15日

道路掃除は貧しい女性たちの大切な収入源だ (図12-5)。

3人のうち右側の若い2人は姉妹で、コミラ県の出身。朝4時から昼12時まで働いているようだ。給与は月給制で5000Taka (1 Taka は約1.3円)。実は8000 Taka 支払われているが、3000Taka をピンハネされていると文句をいうとい



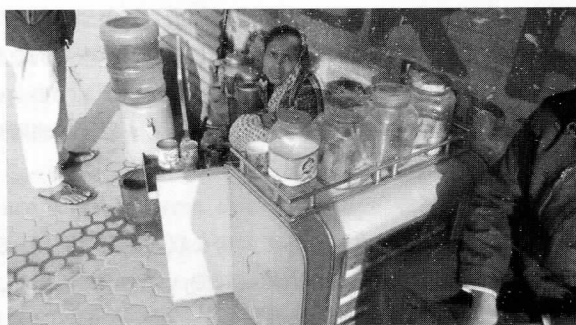
図12-5 朝の道路掃除の女性たち

ングラデシュでは搾取構造がわかりやすく、日本の社会は、オブラートに包んだように、不安定な人たちをくいものになっているようだ。

ダッカでは道の端でモスリムの女性がお茶屋をしている風景をよく見かける。いつ頃から多くなったかははっきりしない。私が JICA の派遣専門家をしていた10年前くらいまでは、こういう店は男性がするものだった。しかし、最近モスリムの女性が目立つようになっている。この女性はマインメンシン県の出身で、現在はボナニー近くの TNT（電話局）と呼ばれる地区に住んでいるそうだ（図12-6）。

この人によれば、このような店を開くには、書類は一切必要ないが、毎日警察官が来て、100Taka を支払っているそうだ。大きな会社の入り口の近くに店を出している。その会社の入社面接を受けに CNG（オート三輪）を一時間

乗ってムンシガンジー県から来たという夫婦と一緒に話をした。夫婦は、主人がポロショバ（日本でいう市役所）につとめている。奥さんは、小学6年生と4年生の子どもの母。



「面接で受かったら 図12-6 歩道の女性がひらいていた茶店

た。日本では、人材派遣会社が定着しつつある。私には、日本のそれはダッカの道路掃除の女性たちのいう「ピンハネ」と変わらないという思いがあるが、日本には表だって文句をいう人はいない。バ

「ダッカで働くのか」とたずねると、「ムンシガンジーに支社があるので、そっちで働く。書類選考されたので来た」という。話をしていると、茶店の女性がミルクティを出してくれた。「朝ランの途中でお金をもっていない」というと、「支払いはいいい」といつてくれた。茶店の女性は裕福ではないので、申し訳ないと思い、お客の夫婦に支払いを頼むと、「いいよ」ところよく払ってくれた。一杯5 Taka (約7円) だった。コンデンスミルク入りのティーだったが美味だった。「バングラデシュは羨ましい。日本だったら、このような歩道でお茶屋を出していたら、警察に撤去される」というと、ポロシヨバのご主人 (40代半ば) が、「日本はエスタブリッシュしているからいいが、バングラデシュはそうじゃないから」と笑った。

日本だって、バングラデシュのようになれば、多くの人が食べていけるようになると思う。年間3万人にのぼる自殺者のうち、すくなくとも経済苦による自殺を防げるような風潮はできるだろう。バングラデシュでは、このような遅い生き方に対して政府は取り締まりをしない。エスタブリッシュされた日本では、自由で元手のかからない、こうした手っ取り早い商売を取り締まる。だから活力がそがれていくように思う。バングラデシュに来ると、貧しい人たちが生きていくための活動を、政府が (取り締まらないということで) 間接的に支援しているように映る。自由さと、貧しいがゆえの力強さと陽気さを感じる。それが今の日本にもっとも欠けている点ではないだろうか。日本社会にはどこか暗さが漂っている。

#### ■2013年12月16日

バングラデシュには敬虔なモスリムが多く、どこでも祈りをささげている。人々が道端で祈っている姿を見かけた。その近くで一人の女性が店を出して、ピタ (米から作った伝統のバングラデシュの菓子) を売っていた。約20年前から、夫が月1500Takaで借りて開いている茶店の前で店を出しているという。場所代は原則とられないが、時々警察に払っている。一日の売り上げは1200 Takaだ。売っているピタは、私の調査地であるタンガイル県の村でも家庭で乾季になるとよく作られる。店の前で、ゴバルゴンジ県からダッカに来て30年間、個人の家をドライバーをしているという男性から話を聞いた。7~8年前から女性が商売をすることが多くなった、それはモスリムの女性も働くことの意味をわかってきたからだと説明してくれた。

今日12月16日はバングラデシュの戦勝記念日にあたるので、米屋も道端の店も、3輪オートも国旗を掲げて、祝っている。独立戦争を経た国は、ナショナリズムがある意味わかりやすくいい。帰



図12-7 沼の散歩道の茶店2軒

るべき原点があるので、国民の心を一つにすることができる。バングラデシュにとっては本当に大切な日なのだろう。

ジールと呼ばれる沼の周囲に作られた、雨季にでも歩ける煉瓦を敷いた散歩道の脇でも茶店があった(図12-7)。

この女性もモスリムで、4、5年前から店を出しているようだ。月に3500Takaを警察とポロショバ(市役所)に支払っている。一日の売り上げは2000Takaくらいで、儲けは500Takaくらいだそうだ。結構よい。

建築資材の鉄筋の商売をしているムンシガンジー出身のお客(写真の左端に立っている人)に、「ベンガル語がしゃべれる日本人にあった」と感動されて、ミルクティをご馳走になった。この人いわく、「与党のアワミリーグはインドから資金をもらい、野党のBNPはアメリカとビジネスマン、ジャマツト・イスラム党はパキスタン、中東のイスラム国からそれぞれ資金が流れている」という。そんなことが茶



図12-8 リキシャとリキシャ引き

店での話題となるのもバングラデシュらしい。お茶屋の主人の女性はネットトログナ県、もうひとり隣の茶店の主人の男性はプロモンバリア県出身だ。いずれの県も洪水災害では有名な県である。が、ダッカに出て来た理由は

残念ながら聞いていない。

人力車のお兄さんは(図12-8)、最近ダッカに来たばかりだという。ディナスプール県の出身だ。いつも人力車をこいでいるわけではないといていた。1日朝4時から午後7時まで働いて、儲けは500Taka、そのうち100Takaを人力車のオーナーに借料として支払う。



図12-9 道路補修用のレンガ造り

レンガ割り(図12-9)は、デルタ地形のバングラデシュでは砂利石が稀なので、道路づくりや補修の重要な仕事である。これらの人々は市役所に雇われていて、一日500Taka、いつも出稼ぎに出てきているようだ。男性は50歳くらい。「4、5年前にチャンドプール県から来た。田舎に家はあるが、妻をなくして、娘は村内で嫁に行った」と話してくれた。私が泊まっているゲストハウスのことを話すと、「あそこの道も自分が作った」と誇らしそうだった。



図12-10 綿菓子売り

綿菓子売りは(図12-10)、シヨリオットプール県の出身で、15年前からダッカに住んでいる。一つが20Takaで、60個ある。月に12000~15000Takaの儲けとなるようだ。

散歩道には、前からあった木が切られずに残されている(図12-11)。効率を優先する日本では考えられない面白い風景だ。いろいろな人がいろいろな職業について、一生懸命に生きていると感じる。旅ランのよさはこうした人々との出会いを作ってくれることにもある。幸せに生きることを考えさせられる。朝ランで出会った人たちは一見貧しいが、明るくたくましい。話すとそのことがよ

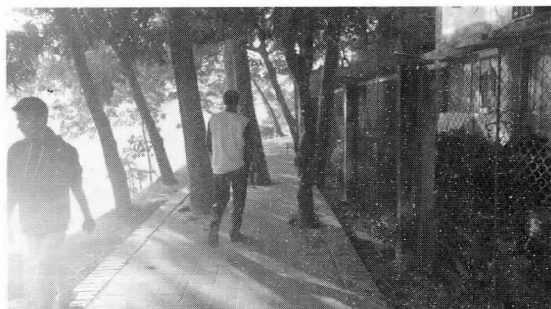


図12-11 木を残した沼の散歩道

しのような菓子（モイ）3 Taka, タバコ1本3~10Taka, キンマ（ピンロウの実、石灰、ジョルダと呼ばれるスパイス）1枚5 Takaである。魔法瓶2個にビスケットやタバコ、キンマなどを紐でぶら下げて運びながら売る。このような運び売りのことを「フェリー」といい、人のことを「ワラ」という。だからこの種の商売人を「フェリーワラ」ともいう。

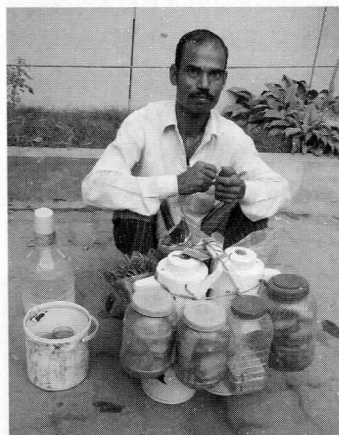


図12-12 フェリーワラ

くわかる。

■2014年12月6日

歩道でお茶を売っている「フェリーワラ」（図12-12）と呼ばれる移動お茶売りとそこに集まっている人たちと話をした。

ミルクティ3 Taka,  
ビスケットと米のおこ

フェリーワラの名前はガシュウディンさん（40歳）。キシオルゴンジー県のオストム村の出身である。オストム村というのは、バングラデシュでも一番大きな村といわれていて、バングラデシュ東北部のハハオールと呼ばれる地域に立地している。雨季には琵琶湖の数倍の水面が出現し、陸の孤島ようになり、乾季には水がひき、水田が出現する。乾季の水田稲作一作のみの地域だ。妻（30歳）は、他の家のパシャールカージ（家の中の掃除などをする仕事）、子どもは上から長男9歳小学3年生、長女8歳小学2年生、次男3歳半だそう

だ。一日ほぼ平均800Takaの売り上げがあり、材料費を除くとだいたい250~300Takaの収入となる。私がフィールドワークで通っているノアカリ県の村の日雇い農夫とあまりかわらない。「朝6

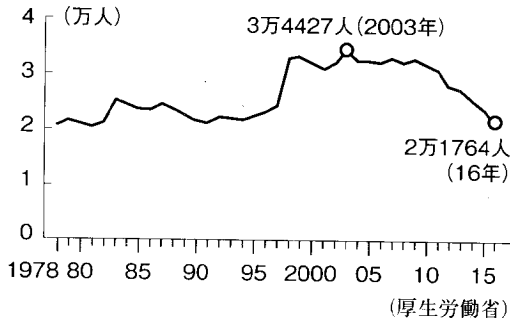


図12-13 年間自殺者数の推移

時に家まで午後4時まで売る。5カ月前に田舎から家族そろって出て来た。村には家だけもっているが、その家は誰も住んでいない」のだそうだ。

自殺者統計が大手新聞で発表される<sup>\*1)</sup>。日本で自殺者が急増したのは1998年で前年度より約1万人増加し、その後10年間近く自殺者は3万人を超えた(図12-13)。2006年7月に内閣府経済社会総合研究所は、1998年以降の自殺者数の増加について、「1998年以降の自殺について、具体的な原因動機としては、(1)自社の倒産・廃業(多くの事例で債務返済難)、(2)失業及び再就職難、(3)収入減少・他者の債務保証等、(4)仕事の量・質の変化(過大な責任、長時間残業)が典型的と考えられる」としている<sup>\*2)</sup>。自殺率(人口10万人あたり自殺者数)の国際比較(2012年推計)によれば、日本は23.1で、世界で9番目に高かった。2009年の統計では、20歳から39歳で、死亡原因のトップが自殺である<sup>\*3)</sup>。日本の若者の自殺の多さは先進諸国では例外的に高い<sup>\*4)</sup>。こうしたことが大きな社会問題となり、日本では自殺対策基本法が2006年6月21日に公布、同年10月28日に施行されている。その効果があったのかどうかは定かではないが、2012年以降自殺者数は減少し始めている。

\* 1) 毎日新聞のデジタル版 (<http://mainichi.jp/articles/20170120/k00/00e/040/172000c>)でも、2017年1月20日に厚生労働省が発表した2016年度の自殺者数(速報値)を報道している。

\* 2) <http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou018/hou018.html>

\* 3) 厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/sui09/deth8.html>

\* 4) 舞田敏彦「絶望の国 日本は世界一『若者自殺者』を量産している」PRESIDENT Online <http://president.jp/articles/-/17058>



「何でこんなにも多くの人々が命を自ら断つのか、死ななければならないのか」、私は日本での自殺者の多さの経済社会的要因に関心をもった。私の地域研究のフィールドはバングラデシュ、インド、ミャンマー、ブータン、日本の京都・滋賀である。2012年推計\*5)では、172カ国中、バングラデシュ99位（10万人中6.7人）に対し、日本は9位（10万人中23.1人）である。日本でこれほど自殺者が多くバングラデシュでは少ないのはなぜだろうか。

行政などの社会制度が整っている国は、時に個人の「心のレジリエンス」を弱めてしまうのではないかと、昨今の日本の社会を見ていて実感する。国や組織という権力に自らをゆだねることによって、「心のレジリエンス」を棚上げして、「楽に生きる」ことを獲得してきたのではないかと考えてしまう。バングラデシュの朝ランで出会う人たちの「心のレジリエンス」の確かさは、私が今まで学んできたバングラデシュの人々の風土、文化や社会の土台となっている、個人の自立性や、個人主義と深い関係があると私は考える。

現在のバングラデシュにあたる英領期の「東ベンガル」の植民地官僚が、村の伝統的な評議会制度や、「マタボール」と呼ばれる地元の指導者たちの行動を見て「東ベンガルには東ベンガルの民主主義がある」と賞賛した記録を、私は読んだことがある。植民地政府が課した土地税の徴収に関することである。他の英領インド地域では村長が土地税を代替してまず支払うということが当たり前であったのに、東ベンガルではマタボールから徴収の委託手数料を要求されたのである。日本人にとっては、こうした行為は褒められることではないが、この行動に対し、英領植民地官僚は敬意をもったのである。私がJICAの長期派遣専門家として働いていた時にも、バングラデシュ人は、依頼したサービスに正当な対価を要求してくることは決して珍しくなく、サービス残業などはしてくれなかった。この国民性を英領植民地官が賞賛したことに対しても、「さすが民主主義の国の官僚だ」と感心したことを覚えている。バングラデシュでは伝統的に個人が大切なのである。これはバングラデシュの人たちが作ってきた生き方の実践哲学であろう。

東ベンガルは洪水、サイクロン常襲地で、個人が粘り強く、個人と個人の協力、地域と地域の協力（レジリエンス）がなければ生きてはいけない。それは日本においても阪神大震災や東日本大震災でのボランティア活動などでよく示

\* 5) 社会実情データ図録 <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2770.html>

されたことでもある。大災害が起きた時、政府の対応には限界があることを日本人の誰もが知らされたことだろう。東日本大震災の発生の2日後に、私は、バングラデシュのダッカでNGOの代表者たちと会議をもっていた。その時ダッカでも、衛生放送のニュース番組がひっきりなしに東日本大震災の現場を伝えていた。それを見ていたときに、1970年に36万4千



図12-14 洪水にも強いリキシャ (1987年8月16日大洪水のダッカ市内にて)

人、1991年に12万6千人、2007年に3,363人、2009年には190人の死者を出したサイクロンの常襲地域であるベンガル湾沿岸地域、そこに立地するハティア島出身で、ハティア島を活動の本拠地とするNGOの代表者で友人のアロームさんが、「安藤、日本の津波の被災地の現場は連日世界に向かって発信されているが、バングラデシュのサイクロンの被災地の現場はリアルタイムで報道されることはなかった。政府の大きな支援もなく、それでもバングラデシュの被災地の人たちは生き抜いてきた」という言葉が今でも耳からはなれない。彼は1970年の未曾有のサイクロン被害も経験している。

朝ランで出会った人たちの「心のレジリエンス」の確かさのルーツを、サイクロンや洪水の度重なる大災害に直面しながら、生き抜く力、生き抜くための協力、個人の存在と、個人の命の大切さを文句なしに受けとめ、尊重する精神に感じる。それを体現しているベンガル人が伝統的に確立してきた社会と個人の関係にレジリエンスの確かさを見出すのである。「心のレジリエンス」の確かさは、個人の存在と個人の命を文句なしに善とし、個人と個人がそうした関係性で結ばれる社会が前提とされよう。つまり、生きるための「心のレジリエンス」がある社会とは、「なんでもやろうとする気にさせる」社会、それを「支援する」懐の深い政府、地域社会が必要とされるのである。バングラデシュの街角の人々から、「個人の生業や生き方の自由を規制しない」懐の深い

社会や人間関係の重要さを学ばされる。

個人のレジリエンスが高い社会とは、「死ななくてよい社会」の実現と言い切ることができるだろう。そのためには、個人の生きる力を引き出し応援する、規制と支援をほどほどにした、個人選択と実践の自由を保障する懐の深い社会や政府を私たちが作っていくことが求められる。

放送大学教材 1910035-1-1811 (テレビ)

## レジリエンスの諸相 —人類史的視点からの挑戦—

発行 2018年3月20日 第1刷  
編著者 奈良由美子・稲村哲也  
発行所 一般財団法人 放送大学教育振興会  
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政福祉琴平ビル  
電話 03 (3502) 2750

市販用は放送大学教材と同じ内容です。定価はカバーに表示してあります。  
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN978-4-595-31865-8 C1360